

2024年7月発行

茨木御堂
第296号



真宗大谷派



茨木別院

(輪番 河原 恵)

〒567-0817 茨木市別院町3-31
TEL (072) 622-2903
FAX (072) 625-9445

南無阿弥陀仏 人と生まれたことの意味をたずねていこう

みんなに原真いがかけてられている

潮干狩り



信ずるは
力なり

(清澤満之の言葉)

先日、清澤満之の終焉の地である愛知県碧南市の西方寺を訪ねてきました。山門の左手に記念碑があり、そこには「信ずるは力なり」という文字が刻まれていました。浄土真宗の教えは、歎異抄の第二章にあるように、「親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり。」というものです。また、第二章にも、「他力真実のむねをあかせるもろもろの聖教は、本願を信じ、念仏もうさば仏になる。」と示されます。清澤満之は、これを自身に受け止め、「如来まします、案ずるに及ばず。」と表明されました。どのようなことが起こっても、如来の本願力回向の信心がこの身にはたらいてくださる。この如来より賜った信心が私をして、すべての事がらを不可思議なる如来の功德と受けとらせるのです。その時、人生への迷いや疑いが消え、何ものをも恐れない無碍なるいのちを生きるものになるのです。清澤満之は三十九歳十一月でこの世を去られました。亡くなられた二畳の部屋の前に座らせていただきました。その二階には、小さな机二つと本箱のある部屋がありました。そこへも上がらせていただきました。清澤満之が晩年に「他力の救済」「わが信念」などを執筆された部屋です。その窓の下には大浜の海岸につづく砂浜があったとのことでした。

清澤満之の生涯は、人が人として生きる意味を、また仏教に出遇うということがいかなることなのかを教えてくださいの白い道となって、この私の眼前に開かれ示されています。この言葉によって、私も浄土真宗を歩み続けていきたいと思うことができました。

南無阿弥陀仏 輪番 河原 恵

茨木別院関連ホームページ

真宗教団連合ホームページ

茨木別院 ➔ ibarakibetsuin.or.jp

<http://www.shin.gr.jp/>

いばらき大谷学園 ➔ ibarakibetsuin.or.jp/kids/

真宗教団連合

検索



園の子どもたちへ いばらき大谷学園



【失敗】から学ぶこと

保育教諭 木村千夏

先日、三歳児クラスの子どもたちと動物園に行った話で盛り上がり、『動物で何が好き?』という話になりました。子どもたちは『うさぎかな!』『わたしも!』『ぼくはライオン!』とかわい動物やかっこいい動物を言う子がほとんどでした。そんな中『せんせいはなにが好きなの?』と聞かれました。今までの私なら【きりん】や【ぞう】といった子どもたちが知っていきそうな動物

を答えていましたが、最近では子どもたちが知らないかな?という動物を答えるようにしています。『先生はナマケモノが好きかな!』といううと、『ああ、【しゃしん】とりやすいもんね!』という答えが返ってきました。ナマケモノは動きがゆっくり:子どもたちが、そういうところも見ていることに驚いたと同時に、嬉しくなりました。

子どもたちの【出来る力】出来るチャンス【出来る力】をつぶしてしまわないように心掛けて保育しています。子どもたちの【力】は未知数です。もともと子どもたちを信じて色々な体験をする機会をつくると良いのかも知れません。

成功体験だけでなく、失敗から学ぶことも多いのです。失敗を失敗で終わらせず、私は【失敗】を恐れな



想像力は無限大

保育教諭 藤澤 真

突然ですが、みなさんは本が好きですか?私は幼少期によく読んでもらい、楽しい思い出があります。私が保育で大切にしている時間は絵本を読む時間です。

このクラスはどのような本が好きか見極めるのも腕の見せ所です。子どもたちが夢中になったときは心の中でガッツポーズ!そんな絵本の時

間を子どもたちと共に楽しんでいきます。

『せんろはつづく』の絵本も大好きな絵本の一つです。お部屋で電車遊びをしていると「せんろがきれてるどうする?」と一人が話すと「つなげればいいんだ」ともう一人が話して線路が繋がっていきます。

絵本の世界に入り込みそこからやりとりが始まり、遊びが広がっていきます。

『ばけばけばけばけばけたくん』

は食べた物に変身してしまうおぼけの話です。絵本に出て来ない食べ物を食べたらどうなるのか?自分が食べたくなるのか?想像しながらやり取りしている子どもたちを見ていると面白いです。

一日のわずかな時間と思われるかもしれませんが、絵本を通して想像力や感性を育くむ保育に繋がってきます。そんな保育をこれからも大切にしていきたいと思えます。

茨木別院 月行事ご案内

● 教如上人ご命日・同朋会(どうぼうかい)

・日時 五日(金) 午後一時半より

・講師 加藤恵師 会場 別院会館

● 本山九日講

・日時 九日(火) 午後三時より

・講師 茨木別院輪番 会所 榮久寺

● 暁天講座

・日時 二十六日(金) / 二十七日(土)

午前七時より勤行、引き続きご法話

・講師 藤元雅文師 会場 別院本堂

(大谷大学准教授)

*パンと牛乳を(株式会社京仏具小堀様の協賛で)用意しております。

● 親鸞聖人ご命日・婦人会例会

・日時 二十八日(日) 午後一時半より

・講師 茨木別院輪番 会場 別院会館

● 教如上人ご命日・同朋会(どうぼうかい)

・日時 五日(月) 午後一時半より

・講師 加藤恵師 会場 別院会館

● お盆墓法要

・日時 七日(水) 午前十時より

・会場 別院会館

● 本山九日講

・日時 九日(金) 午後二時より

・講師 茨木別院輪番 会所 西方寺

● 孟蘭盆会・夏(げ)の御文(おまみ)

・日時 十三日(火) / 十四日(水)

午後一時半より三時頃まで 会場 別院本堂

● 親鸞聖人ご命日・婦人会例会

・日時 二十八日(水) 午後一時半より

・講師 茨木別院輪番 会場 別院会館

令和五年十一月十六日 結願日中法話

「無量寿に生きよう」④

講師：延塚 知道師

(大谷大学名誉教授)



家内がこの八月の二十一日に、長い闘病生活でしたけれども、赤ちゃんのような仏さまのような顔になって、浄土に帰っていきました。人間の死亡率は一〇〇%ですので、他人事ではありません。亡くなっていく方も、それを看取る方も大変です。親鸞聖人の教えがなければ、こんなに晴れ晴れとした気持ちにならなかったはずですので、それをお話しさせていただきます。

二年程前にかかりつけのお医者さんから、「血液検査の結果が少しおかしい。大きな病院で検査をしてください」と、電話がありました。骨髄検査をしたのですが、お医者さんから、「今、顕微鏡で検査をしましたが、残念ながら白血病です」と言われました。家内はまさかそんな病気とは思っていなかったようで、大きな声で「ワァー」と泣き始めました。お医者さんは、「そんなに泣かないで、今は白血病でも助かる方もいます。ただ七〇歳を過ぎているので、骨髄の移植手術は無理です。抗がん剤と一緒に頑張りますよ」と言われ、次の日から入院することになりました。抗がん剤は一年かかって全部で五回打つのですが、最初と最後の抗がん剤が、一番激しかったと思います。打つと白血球がゼロになりますから、抵抗力がないので無菌室に入れられて、コロナでなく

ても会えなくなります。下着等、全てを新品で用意しますし、食べる物も残ればすべて捨てますので一口大のものを準備して、何とか入院生活が始まりました。

白血球がゼロになると外からだけでなく、自分の体の汚い所が炎症をおこし熱が出ます。四〇度以上の熱が出ますが、どこが炎症をおこしているかを突き止めるのに時間がかかり、十日程熱が下がらないのです。熱がでると、「寒くてガタガタ震え、毛布を噛みながら我慢している」とメールが来ます。可哀そうだけど頑張れと言うしかありません。入院したのが五月の連休前でしたが、その年の七月には本山で安居があり、全国から僧侶が集まって勉強をします。勉強をしているときは、宗祖の『教行信証』で元氣をいただくのですが、控室に帰ると「四〇度以上の熱でガタガタ震えている」とメールが来ています。代わってやることもできないし、今から考えると、その頃が一番つらかった。私と長く会えないとパニックを起こします。白血病の闘病と同時に精神科の先生も来て、退院まで一年かかりました。五回、抗癌剤を打ちますが、抗がん剤の間には家に帰って英氣を養うのですが、髪の毛も全部抜け小さなおばあさんになって、玄関も上がれなくなりました。

最後の五回目の時は、意識がなくて先生もダメかもしれないと思つたでしょう。「今、検査に行っています。面会は公にはできないけど、エレベーターで上がってくるから、元気づけてやってください」と言われました。「大丈夫か」と声をかけるのですが、

目はあいているだけで反応がなかった。「これはもうダメだ」と思いました。一年間闘病で苦しんで最後の抗がん剤で亡くなるなんて、あまりにも可哀そうです。それなら最初からダメだと言われた方がよっぽどよかったと思えました。変な歌が頭に浮かんできて、くしばし別れの夜汽車の窓よ、涙見せずにさようなら、この歌がずっと頭の中を回って、「ああこれでもうお別れだ」と思いました。真つ暗な家に帰って電氣をつけて、酒でも飲まずにはおれないのですが、酒を飲んでも少しも酔わない。恥ずかしい話ですが、一人でぼろぼろと涙が出てきました。そうしたら家の猫が、傍に引つ付いて尻尾で私を叩くのです。抱っこしたり傍にいるのが好きじゃないのに、その時は私にくっついてくれました。「ありがとう」と、撫でて逃げません。ばあばはもうダメなのだど猫でも分かっていました。しかし、なんとか意識が回復し、一応寛解ということで退院が決まりました。嬉しくて大きな花束を持って、「よく頑張った」と、病院へ迎えに行きました。

玄関は一人で上れないので引き上げると、「やっと帰ってこられた」と大声で泣いていました。体が弱っていたせいか、私の作った料理もたくさん食べてくれました。みるみる回復して、髪の毛も生えほぼ元通りになりました。五月の連休明けに退院し、病院の検査で数値も上がってきていたのですが、三月にまた数値が下がって骨髄検査をしたら、「残念ながら再発です、もう助かりません。抗がん剤を打って少しでもいのちを延ばす緩和ケアに入ります。すぐに入院してください」と言われました。二人とも何

とも言えない重苦しい気持ちで帰りました。一晚寝て家内が「私病院に行かなくていいかしら」と言うので「いいぞ」と言うのと、嬉しそうな顔をして「私はこの十カ月間が、人生で一番幸せだった。もうこれで十分。抗がん剤を打つてもどうせ亡くなるのなら、一日でもあなたと長く一緒にいる方がいい」と言うのです。

私の先生も最後は癌でした。八十四歳でしたけど癌と分かった途端に「これでもう十分です。家に帰って家で死にます。今日から点滴も薬もいりません」と、さっさと帰られて、「癌もいたたいたものです。生きることも死ぬことも、南無阿彌陀仏のいのちの中にあります」と、堂々と亡くなっていかれました。それを見ていたからかもしれないませんが、お医者さんに、「どうか私のわがままを聞いてください」とお願いして、命終わるまで家で過ごすことになりました。

家に帰ってすぐに京都に行かれました。五〇年間娘を育てていた所ですから、北海道と京都にいる二人の娘を呼んで買い物などを楽しんだようです。義理の息子はイタリアンのシェフをやっていますので、最後の日にそのお店に行つてご馳走してもらい、「素晴らしくおいしかった」と喜んでいました。

それからすぐに延塚家全員を九州に呼んで、「お別れ会」をやりました。孫たちも、「僕はこんなことがあって、ばあばにこうしてもらった、あれが一番うれしかった、ばあばありがとう」と声にならないお礼を言いました。小学校五年生の一番下の子だけは、泣いて何も言葉になりませんでした。そしたらばあばが、孫たち

にお礼を言いました。「あなたたちにお礼を言われるようなことは、何もしてないよ。私はあなたたちが産まれてきたことが、何よりうれしかった。ひとり一人が私の太陽でした。皆が、産まれてきただけで私は十分な幸せを貰ったから、元気で頑張つてね」と、死ぬ覚悟をしたばあばの方からお礼を言われました。孫たちは、ばあばに丸ごと愛されていたことを告げられて、「元気が出たようでした。とにかくいのちの底から楽しいお別れ会でした。」

最初の頃は元気ですから「何も悪いことはしてないのに、どうしてこんな病気になったの。あなたを残して逝くのはいやだ」と、何度も号泣しました。「運命かしら」と言ので「仏教では宿命と言う」。宿命と運命は、どう違うの」と聞くのです。運命は最初から箱で囲われるように人生が決められていて、何ごともあきらめないで仕方がない。ところが仏教は、因果の道理が基本です。私は父親とそっくりです。因果の道理に縁が加わる。私でいえば、父と母が結婚して私が産まれた。そしてその結果を引き受けて生きるしかない。しかし、人生の局面で、選ぶ自由はありません。私はたまたま、大谷大学に行きましたが、大学に行かない自由もありました。家内は富山県の在家の出身です。祖父も祖母も素晴らしいな念仏者で、彼女が親鸞聖人の大学に行くと言ったら、飛び上がって喜んだそうです。私たちは大谷大学で出会いました。優しい人で私がうつ病の時もずっと傍にいて、「死なないうで。生きていたら何をしてもいい」と、私をずっと支えてくれました。二人ともお互いに選んで結婚しました。選ぶ自由はあります。それに縁が

重なって事柄は複雑ですが、選ぶ自由は保障されていますが、必ずその結果を引き受けなければなりません。それが宿業です。

家内は、娘を二人授かり、孫が出来てこんなにうれしいことはないと言っていました。けれど、白血病になったことは嫌だと言うのです。しかし「白血病になったのですから、どこかで白血病の因をもらった」。だから松原先生は「癌もいただいたものです」「生きることも死ぬことも仏さまにいただいたものです」と言われた。だから「白血病だけを嫌だというわけにはいかない。いいことも悪いことも引き受けなければならぬ」と言ったら、「運命と宿業とは、そんなに違うのやね。仏教はやっぱ偉いね」と、感心していました。二、三日は元気です。ところが二、三日経つと「やっぱり死ぬのは嫌だ」と、また号泣します。その繰り返しでした。「私は理解はできるけどイヤだ。あなただったら泣かない？」と聞かれました。「君の三分の二くらいは泣かないかな」「なんで」と言うので、「なんでこんな病気になったのかとか、なんで私だけがという思いは誰でも出てくる。しかしそれは自我に立った妄想だ。何の根拠もないと、私はこの体で知っている。だからそんな気持ちが起こった時は、俺はバカだなと笑うと思う。三分の一くらいは泣くかな」と言ったら、「そう、そこがあなたと違うのよね」と言いました。「あなたは人生の大事な時に、いつも体の方で生きてきたものね」と言っていました。

「元気な内は、しっかりと泣いとけ。その内泣く元気もなくなってくるから」と言うのと「泣いてもいいの？」と言うので「泣いても

いいよ」。「親鸞聖人は偉い人で、無明煩惱われらが身にみちみちて、欲も多く怒り腹立ち嫉み妬む心、ひまなくして臨終の一念に至るまでとどまらず、消えず、絶えず、とおっしゃって下さっているから、泣きたかったら泣きなさい、それが人間なのだ、宗祖は受け止めてくれるから大丈夫、死ぬまで泣いていいよ」と言ったら、「ふふっ」と笑って「親鸞聖人はやさしいね」と言いました。だんだん体が弱ってくると、「私のような仏教が分からない者でも、お念仏を称えたら救われるかしら」と聞くので「救われるに決まっている。心配いらんよ。自我や理性が弱ってくると、元々あった仏さまの一如の世界の方が立ち上がってくる。『観経』では、生涯仏さまに背き続けたものが、南無阿弥陀仏と念仏すれば、仏さまの方が来迎に来て下さると、説いているから心配するな」と言うのと、「うん」と素直に頷いていました。「どんな風に迎えに来るのかしら」と言うので「宮崎駿の「かぐや姫」みたいに、大きな金の船で迎えに来るわ」と言うのを笑っていました。元気がときは、毎日食事の後にいろいろなことを喋りました。寝るのがもつたない、もっと喋りたいと言っていました。

だんだん弱って車イスになりました。夜中の二時と四時に起こしてトイレに連れていく。風呂にも入れてやる。私は若い時に一緒に風呂に入りたかった。「この歳になって初めて一緒に風呂に入ると思わなかった」と、髪を洗ってシャンプーしてやると、「ごめんね」ばかり言っていました。そのうちに寝たきりになり、おしめをするようになりました。涙を流しながら「もうこれ以上は

迷惑をかけられないから、病院に連れて行って」と言うので、「バカなことを言うな。今さら、病院で一人にさせるわけにいかん。君は今日までごめんなさいばかり言ってきたけど、今日からも言うな」。

私はその頃、ご本山の御遠忌や東京の講義など、一日のところはすべて日帰りでした。「帰る時なんと思っっているか分かるか、今日一日元氣やったかな。私が作った昼食たべたかな」。頼むから元氣でいてくれ。一分でも一秒でも早く帰って君の顔が見たい。だから寝たままでもいい。何もしなくていい。生きているだけいい。私のためにも一日でも長く生きてくれ。私にとっては君が生きがいなんや。だからごめんなさいなんて言うな」。

それからというもの、だんだん仏さまのような顔になっていきました。そして、「ごめんなさい」の代わりに「ありがとう」と言うようになりました。おしめを変えるのはなかなか難しいのですよ。最後のおしめの時にはうまくいった。「どや、うまくなっただろう」と言うと「うん、ありがとう、ありがとう」それが最後のことばでした。

だんだん体が弱って頭も働かなくなりました。亡くなる二日前です、朝起きてもまだ寝ているので頭を撫でていたら、ハッと目を覚まして、「もう朝なん。何時？」と聞くので「七時や」と言うと、「よう寝たわ。今日は体が楽や」と言うので、窓を開けて「どや気持ちいいだろう」と聞くと「気持ちいいわ」。「私、何の病氣なの」と聞くので、「白血病や」と言うと、「ふうん、もう治ったの」と言い

ました。「よく寝たら、楽になるから。よく寝て」と言うと「こんなことして、ずっと寝ていいの?」「いい、ずっと寝とけ。私なんでもするから」「うん、ありがとう」と言うのです。元氣なきには白血病は嫌だとあれほど泣いていたのに、亡くなる前には、完全にそれを引き受けたのちになっていました。『観経』の下の品の教えの通りでした。

亡くなる一日前におしめを変えた時「ありがとう。ありがとう」と二回言いました。朝起きても大丈夫だと思っいたら、急に呼吸が荒くなったので、抱きかかえて手を握って「大丈夫か」と叫んでも、もう意識はありませんでした。だんだん、息が長くなっ ていき、すーっと浄土へ帰っていきました。赤ちゃんのような嬉しそうな顔で息を引き取りました。

私たち夫婦に親鸞聖人がいなかったら、こんな素晴らしい時間を過ごせなかった。宗祖は、亡くなっていく人まで全て受け止めて、その都度、本当のことを言ってくださる。彼女は宗祖の『観経』の了解の通りに、浄土に帰りました。念仏をして、苦しみに亡くなってよかったと思っております。三カ月たちましたが、いつも一緒にいるような気がします。だから、さみしいという気はないのですが、張り合いがなくなりました。今だに夜中の二時四時になると目が覚めます。彼女の遺言ですが、「私がいちのち終わってもお願いだから、親鸞聖人の仕事続けてね。頑張っ てね」。「それといつもきれいにして、素敵でいてね」でした。ありがとうございました。お元氣でいてください。

事務所受付について

●事務所受付時間

平日 日 九時～十七時

土・日・祝日 九時～十六時三十分

*法務等で事務所が留守になっている時間があります。ご用事がある場合には事前にご連絡いただき事務所が開いているかご確認の上ご来院お願ひします。

本堂・墓地

参拝時間についてお知らせ

平日・土 十八時頃 閉門

日・祝日 十六時三〇分頃 閉門

八月十四日～十六日

十六時三〇分頃 閉門

境内地の駐車について

車でお墓参りに来られる際、境内地が満杯となり、後からお墓参りに来られた方が、駐車するのに長時間お待ちいただく状況があります。

お墓参りの駐車以外の目的で、境内地をご利用されますと、他の参拝者の方の迷惑となりますので、茨木別院外の他施設利用目的のための駐車は、ご遠慮いただきますようご協力よろしくお願ひいたします。

敬 弔

ご生前のご遺徳を偲び、
謹んで哀悼の意を表します。(敬称略)

記

●法名 弘誓院釋帰邦

俗名 藤井邦夫 九十六歳

●法名 釋明俊

俗名 藤原俊一 八十八歳

●法名 釋尼妙果

俗名 中尾妙子 九十五歳

株式会社花 廣

— 生花・供花・けいこ花 —

茨木市大手町一二一八

☎(〇七二)六二二一四〇二

編集後記

茨木別院では、毎年七月に暁天講座を開催しています。朝早くから講師の先生を招いて法話をいただきます。浄土真宗では“聞法”が大切なことであるといえます。仏法を聞いていく生活、それができれば一番理想的な生活なのかもしれません。そのきっかけとして、暁天講座にご参加いただき、いつもの朝とは少し違う、聞法の生活を体験してみたいかがでしょうか。

もし、法話をもっと聞いてみたいとなれば毎月、茨木別院では五日・二十八日にそれぞれ同朋会と婦人会の定例法話を開催しており、どなたでも気軽にご参加いただいています。また暁天講座では、今年も小堀仏具店様より朝食のパンと飲み物をいただいています。みなさん一緒に法話を聞いてパンもいただいていたければと思います。たくさんの方のご参加お待ちしております。

竹内明人